

Mayor は市長か町長か

——イギリスの市／町と大聖堂——

栗 野 修 司

プロローグ

ふた昔ほど前のこと、九州の大学で日本英文学会の大会が開かれたことがあった。その大会で、トマス・ハーディ（Thomas Hardy）の小説 *The Mayor of Casterbridge* についての研究発表が行われた。発表終了後の質疑応答で、ある高名なイギリスの19世紀小説研究者から、発表者に対して、「あなたは mayor を町長、町長と訳していたが、一体キャスターブリッジは町ですか市ですか」という質問が飛び出した。若い女性の発表者はこの質問に答えられず、結局聴衆のひとりから、これもピント外れで、聴衆が納得するとは思われないような説明が出されて、一件落着となった。作品中で、mayor となった主人公が「この町の柱石のような人（a pillar of the town）」（37）と呼ばれているから、キャスターブリッジが町であることは明白である。しかし、それだけでこの問題を片づけてしまうのになにやら割り切れない思いがした。いや、この問題はテキスト内で完結するような「小さな問題だろうか」という疑問を持ったからだ。以下は、「mayor は市長か、町長か」という疑問をもっと広い、（少し大袈裟だが）歴史的・文化史的枠組の中で考えてみようという試みである。そしてその先にある、文学テキストの読み方という問題にも触れてみたい。

I

トマス・ハーディが、イギリス西南部のドーセット（Dorset）とその周辺

地域を「ウェセックス」と呼び、ここに地理的背景を設定して、19世紀イギリスの現実をかなり正確に反映した作品を残したことは夙に知られていることだから、ここでは深入りしない。キャスターブリッジがドーセットの州都であるドーチェスター（Dorchester）をモデルとしていることもよく知られているところである。では、ドーチェスターは町であって市でないのはなぜなのか。ブリッグス（Asa Briggs）の古典的名著『ヴィクトリア朝の都市（*Victorian Cities*）』には、19世紀の中葉には、セットフォード（Thetford）やシャーボーン（Sherbourne）と同じく、ドーチェスターも市と呼ばれてもよいほどだった、とあるではないか（30）。それなのに現在に至るまで「町」であるのはなぜなのか。

この英文学会から数年後に、全くの偶然だが、ブリッグスがその30年ほど前に、初代の学部長を務めた大学で研究生生活を送ることになった。研究を始めてしばらくしてから、博士論文を指導してくれることになった教授に、こういう質疑があったと、日本英文学会での mayor を巡る顛末を話した。にやりと笑みを浮かべて、彼は本棚から *the Concise Oxford Dictionary* を取り出すと、“city” の項目を開いて、定義の一つを示した。そこにはこう書かれていた—

Brit. (strictly) a town created a city by charter and containing a cathedral. (第8版, 1990)

「ブリテンで（厳密には）特許状によって市となって、大聖堂を持つ町」

簡潔にして要を得たこの定義を見て、（少し大仰だが）積年の疑問がたちまちに氷解した。「日本やアメリカから来た人には理解できないかも知れないけれども」と指導教授は続けた、「イギリスでは市は規模で決まるわけではない。ドーチェスターが町なのは、大聖堂が無く、従って主教（bishop: カソリックでは司教）もいないからだよ。」イギリスのこのような町と市の特殊な行政区分のために、日本人の英文学研究者にとって、市の定義は盲点であり続けたのだった。

念のために、アメリカ系の英語辞典も参照してみる—

A large incorporated town in Great Britain, usually the seat of a bishop, with its title conferred by the Crown. (*The American Heritage Dictionary*, 第3版, 1992)

COD と同じような定義に加えて、司教 (bishop) 座を持つことを付け加えている。「市」のタイトルが、町の規模によるものでなく、『ブリタニカ (*The Encyclopedia Britannica*)』の定義を一部引用すれば、「公式の称号 (an official style)」にすぎず、「地方自治体にとってそのタイトルは全く重要性を持たない」のであれば (第12版, 1990, vol. 16 425)、その首長である mayor の権力も、当然制限される。事実、mayor のポストは大抵の自治体 (町であるか市であるかを問わず) で名誉職である。筆者の住んでいた町ブライトンの mayor は一年間大学の教員が務めていた。ブライトンは人口15万ほどであったから、日本の基準を適用すれば十分に市の資格があると思われたが、現実には町にすぎず、東サセックス (East Sussex) で人口は最大であったのに州都でもなかった。州都はその町の3分の1ほどの規模の小さな町であった。しかし、千年の歴史を誇るこの町には、町のどこからでも眺められるノルマン人の建てた城跡が残り、ヘンリー8世の6人の妻のひとりであるアンの住居も現存し、かの有名なトマス・ペイン (Thomas Paine) も居を構えていたという。19世紀の海水浴ブームで一躍脚光を浴びて発展するまでは、しがない漁村にすぎなかった私の住んでいたブライトンには、とてもとてもこの歴史あるルース (Lewes) と州都のタイトルを争う資格はなかった。お隣の西サセックス (West Sussex) の州都はれっきとした市で、この人口2万6000人の市チチェスター (Chichester) の中心には見事なゴシック大聖堂が誇らしげにそびえ立っていた。チチェスターが人口2万余で市の肩書きを持っていることに驚いてはいけな。ウェールズにあるセント・デビッツ (St. David's) の人口は2,000人足らずで、公式にブリテンで一番小さい市とされている。というのもここにはウェールズの守護聖人であるセント・デビッド (Dewi Ddyfrwr=David the Waterdrinker) が興した修道院の跡に12世紀に建てられた、800年の歴史を誇る由緒正しい大聖堂があるからだ。

ブリッグスもわざわざ断っているように、また、COD が定義に「厳密に言う」と断りを入れているように、city はいくつかの定義の可能性を許す。時には曖昧な使われ方もするようだ。試しに、先ほどのハーディがどのように町と市を使い分けているか見てみよう。

- 1) “the remote and fashionable city of Exonbury” (*The Woodlanders* 162)

エクソンベリーは南デヴォン (Devon) にあるエクセター (Exeter) のこと。この市には、ノルマン様式の塔をふたつ持つ、イングランドでもっとも装飾を凝らした大聖堂がある。1056年に主教座が置かれた。

- 2) “this quiet city” (*Jude the Obscure* 139)

作品中にあらわれるメルチェスター (Melchester) を指している。メルチェスターは現実のソールズベリー (Salisbury) がモデル。この市にある大聖堂はイングランドでは一番高く、ヨーロッパでは二番目に高い尖塔を持っている。

- 3) “Christminster city” (*Jude the Obscure* 77)

クライストミンスターはオクスフォード (Oxford) のこと。規模としてはイングランドで最も小さい、1230年頃に建てられたノルマン様式の尖塔を持つ大聖堂がある。この大聖堂はクライスト・チャーチ・カレッジ (Christ Church College) のチャペルでもある。オクスフォードはもちろん市。

- 4) “the city of Wintoncester—that fine old city” (*Tess of the d’Urbervilles* 382)

ヒロインが処刑されたウィントンセスターは実際の名前がウィンチェスター (Winchester)。アルフレッド大王 (Alfred the Great) の王国ウェセックス (Wessex) の首都であった。ここの大聖堂には作家オースティン (Jane Austen) の墓があり、大聖堂の南隣に、彼女が住んでいた家が残っている。

- 5) “town of Sandbourne” (*The Woodlanders* 162n)

1) のエクソンベリーはハーディの早い時期の草稿ではこうなっていた。サンドボーンは19世紀に海水浴ブームのおかげで発展した町ボーンマス (Bournemouth) のこと。大聖堂はなく、従って人口は大きい (15万5000人。立派な交響楽団もある)、町である。

6) “the road leading up out of the town towards Casterbridge” (*Under the Greenwood Tree* 118)

この町はハーディのバドマス (Budmouth) のこと。ドーチェスターから鉄道で数十分南へ行った海辺のリゾートで、実名はウェイマス (Weymouth)。ハーディの小説に頻繁に登場する。イギリス国王ジョージ3世お気に入りの町。もちろん大聖堂はない。余談だが、このジョージ3世は国王に在位すること60年。これは現在のエリザベス2世、ヴィクトリアについて3番目に長い。長いけれども、彼の治世にアメリカ独立革命、フランス革命、産業革命の3つの革命が起き、イギリスはフランスとのナポレオン戦争を戦った。彼は晩年精神障害を患い、後にジョージ4世となる王太子が摂政 (regent) を務めた。そのため、ジョージ3世の長い治世の最後の時代 (1811-20) を摂政時代 (the Regency) と呼んでいる。短くてもこの時代には建築史ではバルコニーと張り出し窓を持った特徴のある住宅が建てられた (Yorke 34-5)。ローマがブリテン島を占領していた時代に建てられた大浴場でよく知られているバースは摂政時代の建築物が多いことでもよく知られている。閑話休題、以上のように、ハーディも町と市を厳密に区別して使っているのが判る。

II

イギリスで city であることは、その町の規模ではなく大聖堂の有無が関わっていることを見てきた。しかしこれは歴史的に見ると真実ではない。というのは、都市が現在のような形を取り始めた中世には、都市の規模と大聖堂の建設が重要な関連性を持っていたからだ。アングロ・サクソンの7王国の都であったウィンチェスターに大聖堂があるという事実は、都市の規模と大聖堂の関わりを示唆する事実である。(以下の統計はケンドール [Paul Murray Kendall] に依る。) チューダー朝の初期 (15世紀後半) に、ロンドンに次いで人口の多さを誇ったのはヨーク (York) であった。それ以外の「大都市」として、ブリストル (Bristol)、ノリッジ (Norwich)⁽¹⁾、コヴェントリー (Coventry)、ウィンチェスター、エクセター、カンタベリー (Canterbury)、

コルチェスター (Colchester)、リンカン (Lincoln) などがあった。いずれもローマがブリテン島を占領していたときに建てられた町であるという共通の起源を持ち、中世には羊毛の取引で繁栄したという。また、人口5,000人は町としては規模が小さいが、産業革命までは、都会と田園の区別がはっきりしていなかった（人口を特定しようにも町の範囲が明確でなかったので不可能）という状況と、1348年と49年にブリテン島でも猖獗を極めた黒死病によって3分の2にまで減少した人口が、まだ十分に回復していなかった、ということを思い出していただきたい。この疫病による人口の減少率についても正確な数字は知られていない。死者の数を数える余裕のあらばこそ、誰もが黒死病から逃れるのに必死であつたらうからこれも無理ないところである。次に引用するのはロチェスター (Rochester。604年に主教座となった) の一僧侶が1349年に記した見聞—

黒死病が余りにも多くの人々を死へ追いやったので、誰も死体を墓地まで運んでくれる人を見つけることが出来なかった。男達も女達も自分の子供を肩に担いで教会へ運び、共同の墓穴へ投げ入れた。これらの墓穴からはぞっとするようないやな臭いが立ちこめているので、ほとんど誰も墓地のそばを歩こうとはしなかった。

(Rowley 21に引用)

疫病は聖俗、貴賤、老若、男女を区別しないから、ブリテン島の至るところ死屍累々の有様であつた。黒死病は聖俗の区別をしないと云ったが、人間は同類の区別をする。墓銘碑に名を刻んでもらうことなどとてもない、共同の墓穴へ投げ捨てられて忘れ去られるのは貧しい俗人を待ち受ける運命であつて、どうやら僧侶の場合には違っていたらしい。というのは、イングランドの10の主教区の聖職録を持つ僧については詳しい記録が残されているからだ。黒死病（ネズミに寄生するノミを媒介とする腺ペスト）はアジア北方のステップに始まり、中国から貿易路を辿って中東からヨーロッパ大陸を經由して、1349年の春にサザンプトンに「上陸」したことが知られているが、ウースター (Worcester) の主教区では、その年の7月までに217教区での教区牧師の欠

員が報告されている。もちろん、すべての欠員が牧師の死によるものとは考えられないが（中には罹病を恐れて田舎へ逃げ出した不心得者もいるだろうから）。また、早くも同じ年の8月6日にウースターの主教が黒死病で亡くなったという記録が残されている（Platt 67）。

このように、比較的整っている僧侶の死の記録から全体の死亡率も推定できるというわけである。興味深いことであるし、主教区のことであれば大聖堂とも関係がないわけではないから、いささか雑談が長くなるがそれを記すと、ヨークで39%、リッチフィールド（Lichfield）⁽²⁾で39,6%、バースとウェルズ（Bath and Wells）⁽³⁾では47,6%、イイリー（Ely）⁽⁴⁾が48,5%、エクセター、ウィンチェスター、ノリッジのそれぞれの主教区は48,8%だったそうだと。以上の数字からローリーは僧の死亡率を45%と推定している（21）。黒死病で激減した総人口がいつ頃から回復を始めたかについても諸説があるが、早いものは1470年代から、遅いものは1520年代から回復が始まったと推定している（Dyer 218）。人口回復途中のこの時期、大半の都市は人口5千人に満たなかったけれども、それでも中世では大都市の部類であった。

ヨーロッパを広く旅したひとは気づくだろうが、西ローマ帝国が減じた476年からほぼ500年の間（中世前期）に建てられた大規模建造物はほとんど存在しない。また、この間はローマ帝国時代に建てられた建造物が破壊された時代でもあった。ゲルマン人やノルマン人などが頻繁に略奪を繰り返したからだが、彼らに対抗して、防戦のための砦や城壁の構造物として、ローマ帝国時代の歴史的建造物に使われていた石を「リサイクル」した人たちにもその責任の一端を帰すことができる⁽⁵⁾。そういう抵抗勢力の中心になったのが勃興期にあったキリスト教会である。リード（Michael Reed）に依れば、669年には既に、カンタベリー、ロンドン、ロチェスター、ダンウィッチ（Dunwich）、ウィンチェスター、リッチフィールド、ヨークの7都市に主教管区が存在していたという（169）。いささか煩わしいが、英国国教会の資料によって、主要な都市に主教管区が設立された年を挙げると、（古いもの順に）カンタベリー（597年）、ロンドン（604年）、ヨーク（625年）、ウィンチェスター（662年）、エクセター（1056年）、リンカン（1072年）、ノリッジ（1091年）である。これら

の都市は主教管区としての長い歴史を持っており、それ故に後に市となったのは故無きにあらずだが、こういう歴史ある都市以外に、国王の特別の法律によって、つまり *honoris causa* (for the sake of honour, 名誉のために)、市に晴れて昇格したのは1889年のバーミンガムを嚆矢とする（1905年になって、ここに主教管区が設立された）。

大聖堂はその壮大な規模によって我々の好奇心をかき立てるが、その歴史によっても我々を魅了してやまない。現在英国国教会はイングランドを南北2つの大主教区（archdiocese）に分け、北半分をヨークの大主教（archbishop）が、南半分をカンタベリーの大主教がそれぞれ統括している。さらに、南北の大主教区は、29と14の主教管区に分けられており、その下位区分としてそれぞれの主教管区に最小4から最大42の地方監督区（rural deanery）が置かれている。これが教区（parish）と呼ばれるものである。

カンタベリーとヨークにどのような事情で首座主教区が置かれたかは、いささか雑談めくが興味深いことなのでここに紹介する。ローマの属領時代に、既にブリテン島にはキリスト教が到来していた。聖アルバン（St. Alban of Verulamium）の殉教はかなり早くのこととされているし、西暦314年のアルレスの公会議（the Council of Arles）には3人の主教（ヨーク、ロンドン、コルチェスター）がブリテン島から出席したことから考えて、キリスト教会が既にこの地に根を下ろしていたと考えられる（Chadwick 191）。ローマの支配が潰えるとともにキリスト教会の活動にも空白期間が生じて、教会の組織が再びできあがるのは7世紀前半のベネディクト会の修道士達の伝導を待たねばならなかった。聖ベータ（Bede, 672 or 673-735）の『英国国教会史（*A History of the English Church and People*）』に依れば、ブリテン島の組織的なキリスト教化は、ローマ教皇ベネディクト（Benedict）1世の時代というから紀元574年から578年のこと、ある日、後の教皇グレゴリウス（Gregorius）1世となる行政長官グレゴリウスが、ローマの市場で商品に混じって色白で眉目秀麗で金髪の若い異邦人数名が売られているのを目にしたところから始まる。興味を抱いたグレゴリウスが商人に、彼の者達はいずこから来たのか、と問うと、ブリテンという島から来て、そこでは皆あのような顔立ちをしているという答

えを得た。しからばその島の民はキリスト教徒であるか、それとも無知な異教徒であるか、という問には、後者であるという返事が返ってきた。このエピソードの結論はいささか作り話（ページから見ると自画自賛）めくが、後の教皇はかくも美しい風貌の人々が神の言葉を知らぬことがあってはならないと嘆き悲しみつつ、さらに質問を続けたという。「その民族の名は」と尋ねて、アングル人（Angles）であるとの返答を得ると、「なるほど言い得て妙である、彼らは天使のごとき（angelic）容貌であるから」と感じ入る。「どこの属領から来たのか」という問からは、王国デイラ（Deira、現在のハンバーサイド辺り）であるとの返事を引き出す。「さもありなん」とグレゴリウスはまたもや独り合点をする。「彼らは間違いなく『天罰から（deira=from wrath）』救われて、神の慈悲へと召されるであろう。」さらに「彼らの王の名は何というのか、」と質問は続く。「アレ（Alle）にて候」という答えに、「さてさて、彼の国には創造主を称える『アレルヤ（Alleluia）』の音が響いていることであろうよ、」と言葉をもてあそびながら、感極まった様子であったという。かくして教皇ベネディクトから布教の許しを得て、グレゴリウスはブリテン島を目指して旅に出たが、やんぬるかな、3日後にローマに戻るよう命令を受けて志を果たすことが出来なかった（99-100）。

このエピソード、いささかできすぎの感があって、ひょっとすると眉に唾して読む類のものであるかも知れない。しかしページは大真面目である。グレゴリウスの北方の島国への関心も決して一過性のものではなかったということは、その後の歴史が証明している。とにかく、彼が肉体（の美しさ）と精神（宗教的な感受性）とを結びつけたことといい、アングル人と天使との語呂合わせといい、後世の創作のようにも見えなくもない状況から、ブリテン島の布教は始まった。歴史は偶然と必然から出来ているわけであるし、ひとりの人物の気まぐれが歴史を作るのは他に例がないわけでもないから、ページの伝えるこの逸話もあながち史実でないと断言できぬ。歴史に「もし」は禁物と百も承知で言うならば、グレゴリウスの気まぐれなかりせば、アウグスティヌスのブリテン島での布教も、ケント王のエセルバルト（Aethelberht）の改宗も、カンタベリーに英国国教会の主教座聖堂が置かれることもなかったわけである。という

のは、それから20年ほど後のこと、教皇となったグレゴリウスは、気まぐれに発したかにも見えるブリテン島布教の意志を未だ捨ててはいなかった。彼がベネディクト会の修道士アウグスティヌスをこの島に遣わしたのが596年のこと、翌年には無事ケントに上陸して、エセルバルトをキリスト教に改宗させた、とベダは伝えている。616年のケント王の死によって、しかし、カンタベリーに設立された教会は壊滅寸前に追い込まれた。しかしながら、ブリテン島南部での失地は北部での布教拡大によって均衡が保たれた。すなわち、601年にブリテン島に上陸したパウリヌス（Paulinus）がノーサンブリアでの布教に成功を取め、その王エドウィン（Edwin）をキリスト教に改宗させたのである。かくして南のカンタベリーと北のヨークはブリテン島におけるキリスト教の二大聖地となり、後に現在見るような英国国教会の首座主教区となったのである。

III

さて cathedral を大聖堂と訳すからには、cathedral は当然大きいのか、という質問も出そうである。答えは、Yes and No である。大聖堂の中には、リンカンやロンドンのセント・ポール（St Paul）のように壮大なものもある。産業革命によって、ロンドンのセント・パンクラス（St. Pancras）駅などの巨大な鉄骨建築が出現するまでは、大聖堂はブリテン島で最大の建造物と言ってよかった。なるほどブレナム宮殿⁽⁶⁾などは、広大な敷地を占めているが、無数の壁が内部を仕切っているので、内部空間の広さという点では大聖堂にはかなわない。あるいは、石灰岩でできた丘の上に建つリンカン大聖堂は何マイルの彼方からも見渡せる。ここを訪れる現代の旅人は車窓からの壮大な眺めに驚きを覚えるだろうし、鉄道以前の巡礼は、リンカンの南部に広く広がる沼沢地帯（the Fens と呼ばれる。ヴァイキングの進軍もここでは困難を極め、リンカン攻略するのに苦しんだという）を渡るのに難渋した後で、遙か遠くの丘にそびえる大聖堂を発見した時には、旅の苦勞も忘れて、「黙示録」の書記ヨハネが描くところの天上のエルサレムもさもあらんかと感激し、至福を味わっ

たことであろう。

文字通りの大聖堂もあれば、オクスフォードやカーライル (Carlisle) のもの (それぞれイングランドで一番目と二番目に小さい) のように教区教会堂とさして規模の違わない「大」聖堂もある。ノリッジの大聖堂は1096年に建てられた修道院の規模を大きくしたもので (そのため、この大聖堂には修道院時代の見事な回廊が付属している)、ソールズベリーの尖塔に次ぐ96メートルの高さの塔がそびえる、壮大なものであるが、大聖堂を見るべくイースト・アングリアのこの市を訪れる人は、しばしばセント・ピーター・マンクロフト教会 (St. Peter Mancroft) をノリッジ大聖堂であると思ひこむという。この堂々とした美しい教区教会堂は、メソジスト派の創立者であるウェズレー (John Wesley) をして、「これよりも美しい教区教会堂を見たという記憶はほとんどない」と言わしめたほどであった (“The Church of St Peter Mancroft”)。コッツウォルズの中心にある町サイレンセスター (Sirencester) にはイングランドでもっとも大きな教区教会堂といわれる洗礼者ヨハネ教会がある。

cathedral を大聖堂と訳すことから生ずる誤解と混乱を避けるために、cathedral の語源のラテン語 cathedra、つまり a chair あるいは a throne、まで遡って、言葉の意味に忠実に「主教座聖堂」という訳を好む人もいる。つまり cathedral とはその主教区における首長たる主教が執務する場所を内部に持った建物であるから。なるほど、主教座聖堂であれば、その規模は余り問題にならないかもしれない。

大聖堂の歴史は英国史と密に関連している。英国史を学ぶものにとって興味深いのは、ブリテン島からローマが軍勢を引きあげた5世紀の初めからノルマン人に征服される11世紀まで、現在のイングランドにあたる領域には巨大な建造物が建てられることはほとんどなかったという事実である。ローマ人は西暦43年から409年まで現在のイングランドの大半、具体的に言えば北はハンバー河から西はセバーン河までの地域に、ローマ風の都市文化をもたらした。紀元80年に総督を務めたアグリコーラ (Agricola) は被支配民 (ケルト人) の間にトーガが流行していると記している。またケルト人達の中にはラテン語をよくするものがあって、文化のレベルも高く、マクドウォール (David

McDowall) などは、イングランドの歴史上、ローマ属領時代の識字率の高さに匹敵するのは、やっと15世紀になってからだと推定するほどである (9)。

ローマ人の功績で忘れてならないのは、彼らがその卓越した土木工事の能力を生かして、彼らの「ブリタニア」で20ほどの小邑をそれぞれ人口5,000人あまりの都市に育てたことである。「育てた」と書いたのはそのうちのいくつかは、ローマ人がブリテン島を侵略する前から既に集落としての存在が確認されているからだ。ローマ人の建設した都市の多くは、その後、まずアングロ・サクソン、次いでノルマンとブリテン島の支配者が交代したにもかかわらず、ラテン語起源の名前によって現在でも容易に特定できる。ローマ人が建設した都市には軍隊が駐屯していたので、ラテン語のキャンプに当たる語 “castra” が都市の名前の一部として残っているからである。サイレンセスター、レスター (Leicester)、ドンカスター (Doncaster)、ウィンチェスター、チェスター (Chester)、ドーチェスターなどである。リンカンもケルト人によって London と呼ばれていたが、ローマの植民地となってからはローマ風に Lindum Colonia となり、Lindocolina (Bede, c. 730年)、Lindcylene (『アングロ・サクソン年代記 (*Anglo-Saxon Chronicle*)』、942年)、Lincolnia (『ドゥームズデーブック (*Domesday Book*)』 (William 1 世が 1086 年に作らせた土地台帳) と少しずつ呼び名を変えた (Reaney 204)。現在のリンカンという名はケルト語とラテン語のハイブリッドであると言えよう。

ローマ人が建設した町のいくつかはその後到大聖堂を持つ市となった。エクセター、ウィンチェスター、チチェスター、リンカン、ヨーク、カンタベリーなどである。中世以降に大聖堂を持った都市は、既にそれ以前から歴史の古さと規模の大きさにおいて抜きん出ている。もちろんこれは当時のキリスト教会が政治的かつ経済的に強大であったという理由による。マグナ・カルタ (Magna Carta, 1215年) の第一条は、「教会が自由であり、決して犯されることの無い十分な諸権利と特権を享受すること」を国王に認めさせているし、寄進者の中にエドワード告白王 (Edward the Confessor) やリチャード2世が名を連ねるウエストミンスター・アビー (Westminster Abbey) は、1100年頃には60,000エーカーの領地を所有していたし、13世紀中葉にイイリーの

主教の所有地は70,000エーカーに達したという (Harvey 30-1)。後にヘンリー 8 世が宗教改革を断行したのは、国土の 4 分の 1 を所有する教会の財産目当てでもあったことはよく知られている。

ローマ人のもうひとつの功績はこれらの都市を結ぶ街道を建設したことであろう。これらの街道の多くはローマ人達がイギリスから退去してからも長い間使われた。また時間との戦いに敗れて、いつの間にか使われなくなったローマ人の道 (Roman road) も、起伏に乏しいイングランドの草原を一直線に果てしなく走り、距離の魔法にとりつかれた人の心に詩的想像力を喚起するに十分であった。例えば、ローマの属領時代に、キャスターブリッジことドーチェスターはドゥルノヴァリア (Durnovaria) とローマ風の名を持つ主要都市であり、イセニアーナ道 (Via Iceniana) と呼ばれる大きな街道が通じていた (Pennell 345)。その町の郊外に生まれ育ったハーディは、詩や小説の中でしばしばローマ人の道に触れている。その一つ、タイトルも文字通りに「ローマ人の作った道 (The Roman Road)」――

ローマ人の作った道はヒースの荒野を横切って
頭髮を分ける なま白い一線のようにまっすぐ、
覆う木もなく走っている。考え深い人たちは
この道の今と昔を対照し
発掘し、測定し、比較考量する

そして彼らは虚空の中に 兜を被った
ローマ軍団の兵士の幻を見る。兵士達は誇らしげに
鷲印のローマ軍旗を高く掲げ今日再び進軍するローマ人の道路を。

.....

(*Complete Poems* 264-5、森松健介訳)

しかしアングロ・サクソン人がローマ人達に続いてブリテン島を侵略し、先住民のケルト人達をウェールズやスコットランドへ追いやったが、再びリード

に依れば、ノルマンの征服以前のイングランドの風景を特徴づけるのは木造教会であったという (174)。これを彼らが先住民族やその支配者達よりも土木建築の技術に劣っていたと考えるのは誤りである。ローマ人という強大な支配者がブリテン島から去ってノルマン王家が君臨するまでの6世紀間は、大陸から陸続と押し寄せる民族間の、またヴァイキングとの、争いが絶えない時代であった。これもベーダの伝えるところだが、かのアウグスティヌスにしても、教皇グレゴリウスからブリテン島での布教を命ぜられてゴール (現在のフランス) まで来たものの、「自分たちには判らぬ言葉を話す、野蛮で、獷猛で、異教の神を信ずる人々の元へ赴くという考えに戦慄を覚えて」、「この危険で、困難で、不確かな旅から呼び戻してほしい」と教皇に懇請すべく手紙を送ったほどであったという (66-7)。そんな荒涼たる風景に再び壮大な石造りの建造物が出現したのは、ノルマン人によってブリテン島が征服されてからである。とはいえアングロ・サクソン人が決して石造りの教会を建てなかったというわけではない。コップ (Gerald Cobb) は宗教改革以前にはイングランドに698の教会があったと推定している。これらの大半は、宗教改革や、17世紀の内戦 (the Civil War) や、18世紀後半まで続いたゴシック建築を軽蔑しバロックを好む傾向のために破壊されたのだった (6)。かろうじて現在見られるアングロ・サクソンの遺産は、規模としては大聖堂に遙かに及ばない教区教会堂として見られるに過ぎない。その一つ、ブリックスワース (Brixworth) の教区教会堂はイングランドに現存するアングロ・サクソン時代の教会では最大とされる (Platt 2)。

現在の43の主教区に建つ大聖堂のうち、英国国教会が“ancient cathedrals”と呼ぶものは、ヘンリー8世の宗教改革を境に2つのグループに分類されている。宗教改革以前から既に大聖堂であって修道院ではなかったものを“Old Foundation”と呼び、ヘンリーによってそれまで修道院であったものが大聖堂にされたものを“New Foundation”と呼ぶ。後者には、ブリストル (1542)、ピーターバラ (Peterborough, 1541)⁽⁷⁾ などがある。“Old foundation”に属する大聖堂の大部分はノルマン人によって建設されているので、現代でも、ダーラム大聖堂を始めとして、ノルマン様式を見る機会には事欠かな

い。

全体の統一美とか壮麗という点では、中世に建てられて幾度も改修と補修を繰り返しながら現在に至ったゴシック大聖堂は、後世の大聖堂、例えば、レン（Christopher Wren）の傑作中の傑作である古典様式のセント・ポールにはかなわない。それにもかかわらず、1000年近い風雪に耐えたゴシック大聖堂が我々を魅了してやまないのは、それらがイングランドの文化—ケルト、ローマ、アングロ・サクソン、ノルマンのそれぞれの文化のハイブリッド—を見事に具現しているからであろう。大聖堂と文化との結びつきは、cathedral school と呼ばれる教育機関の存在が示している。普通には、大聖堂を持つ都市にあるプレップ・スクール、しばしば、パブリック・スクールのことを指すが、その典型として、カンタベリーのキングズ・スクール（The King's School）とウィンチェスターのウィンチェスター・カレッジ（Winchester College）が挙げられる。両校とも西暦600年に設立されたというから、イギリス最古の大学よりも半世紀も古い歴史を誇る。アウグスティヌスがブリテン島に到着し、カンタベリーで最初の夜を過ごした宿のある通りは、キングズ・スクールの購買部の裏側に現在も残っているという（McConnell 14）。一方のウィンチェスター・カレッジは最古のパブリック・スクールであるとされている。両校とも、ラグビー（Rugby School）やハーロウ（Harrow School）やイートン（Eaton College）ほどには、日本での知名度は高くないが、オックスブリッジへの進学率では他を凌駕している。あるいは、1960年代に、イギリス政府は、それまで既に存在していた伝統的な大学—オックスブリッジやリーズ（Leeds）、プリストル、ロンドンなどの諸大学—に加えて、新しい理念を持った大学を設立しようとした時、その候補地に cathedral city のヨーク（University of York）、ノリッジ（University of East Anglia）、カンタベリー（University of Kent）を含めた。その意図するところは新しい理念の大学と歴史的に古い環境、革新と伝統との融合であろうか。これらの大学の設立以来のめざましい発展は、政府の方針が賢明であったことを示している。

エピソード

町と市の区別は決して行政上重要なものではないから、mayor（町長あるいは市長）の地位は名誉職であって、なんらの権力をも伴わない。ロンドン市長だけはロードメヤー（Lord Mayor）と呼ばれるが、同様に名誉職である。次に引用するのは *The Mayor of Casterbridge* についてのある論文の結論――

家政（housekeeping）を練る主婦エリザベスには、触手を海外（外部）へ伸ばし続け、植民地統治の軍事政策（campaign）を練るインド皇帝にもなったヴィクトリア女王のイメージが重ねられる。エリザベスが、妻という主体を成型する際に、ヘンチャードに代わり、夫ファーフレの眼差しを新たな「父」の眼差しとするだろうことが伺える一方で、エリザベスには、町長ファーフレを政治的統治下に治める女王のイメージが重ね合わされている。

いささか文章が晦渋であり、作品のプロットを知らぬとなおさら意味が取りにくいかも知れない。しかし、ハーディのこの小説の筋に疎い人でも、この結論が二カ所で誤りを犯していることに気づくであろう。この論文の著者は、エリザベスとインド皇帝たるヴィクトリア女王のイメージを重ねあわせているが、いささか強引である。この作品の時代背景は1820年代から40年代と推定されるが、ヴィクトリア女王がインド皇帝になるのは1877年である。この30年の時間のギャップを無視しえたとしても、読者がこのヒロイン像にヴィクトリア女王のイメージを読み込むことが不当だと思われるのはもうひとつ別の理由による。

ヴィクトリア女王は1862年に夫アルバート公（Prince Albert）を亡くしてから、世間の批判にも関わらず、彼女の即位50周年にあたる1877年まで喪に服して、ロンドンを留守にして、ワイト島のオスボーン・ハウス（Osborne House）やスコットランドのバルモラル城（Balmoral）で半隠遁生活を送る

ことが多かった。このような事実を前にしても、1886年に出版された *The Mayor of Casterbridge* のヒロインに、あまり国民の前には姿を現さず、また現したとしても地味な黒い服に身を包んだ女王ではなく、インド皇帝ヴィクトリアのイメージを重ねて読むことができると主張するのは妥当だろうか。さらに、論文の筆者は、ヴィクトリア女王同様、町長ファーフレー（ヒロインのエリザベスの夫）も政治権力であるかのように書いている。作品中の登場人物によってキャスターブリッジの町長が “powerfullest” (37) と称えられるのは、彼が mayor であるからでは決してない。小麦の集散地であるこの町の商取引を一手に扱う商人であることと、町の治安判事であるためなのだ。

さらに、ヴィクトリア女王が政治権力であるかのような書き方をしているがこれも間違い。イギリスの歴史に明るい者ならば、イギリスの王権と議会は伝統的に対立関係にあったが、1688年の名誉革命は君主の地位が神の与えたものではなく、憲法と議会に基づくものであると規定し、議회를王権よりも強力な政治権力とする契機になったことをよく知っている。アン女王の治世になると国家財政に関して下院 (the Commons) の優位は不動のものになっていたという (Loewenstein 77)。王室内での確執も王権の弱体化に拍車をかけた。1714年にアン女王が亡くなると、政権を握ったばかりのホイッグ党政府は秘密裏に王位継承の手はずを整えて、ハノーヴァー家のジョージを王位につけた。カソリックに近いスチュアート家の君主よりはまし、という選択であった。ジョージ1世は即位したときに既に年齢54歳。英語を学ぶつもりは更々なく、イギリスにいることよりもドイツのハノーバーにいることを好んだという。既にこのころには閣議には君主が臨席する慣わしとなっており、従って政策に君主の意向を反映させることもできたが、ひとつには英語を話せないのと、ひとつにはイギリスの政治に関心がないのとで、ジョージ王、一度も閣議に姿を見ることがなかったという。彼に伴って大陸からブリテン島へ渡ってきたのは妻ではなくふたりの愛妾であった。彼は1682年に従妹のソフィアと結婚したが、1694年に不貞の疑いで結婚を解消した。彼女は1726年に死ぬまで監禁状態で世を送った。かくして、それまで政府の中心であった宮廷は事実上存在しなくなり、国家の主権は大臣達に委ねられた。内閣の政府による政治は、ジョージ

1世の治世に始まり、ウォルポール（Sir Robert Walpole）はイギリスで最初の首相となった。つまり、このときには、「国王は君臨すれども統治せず」「The King reigns, but he does not rule.」という状況が既に生まれていたのである。

その後も、ジョージ1世の曾孫に当たるジョージ3世の狂気やジョージ4世の意志薄弱、ウィリアム4世（ジョージ3世の3男。議会の意向とは別の人物を首相に任命した、最後のイギリス君主として知られる）の無能が続いて、君主の権力の弱体化は進み、その間、ピット（William Pitt）が内閣の組織を強化した（Loewenstein 96-7）。だから、ヴィクトリアの即位までに、国王の政治権力はかなり削がれていたのだ。既に1744年、ジョージ2世は、「この国では大臣が王様だ」と嘆いたという（Cannon and Griffiths 473）。なるほど、ヴィクトリア女王の治世とイギリスの帝国主義的発展とは時間的に重なり合うが、それは女王自身の全くあずかり知らぬことで、彼女を特徴づけるのは、むしろ彼女が子供6人、孫40人、曾孫37人を残したことであろうか。ヴィクトリア女王とアルバート公は「品のよい、幸せな家庭生活（respectable and happy family life）」の絶好のモデルであったし、王室の理想とするものは旧来の貴族階級のものではなく、中産階級のものと同じでいた、とブリッグスも書いているのではないか（*Victorian People* 20. See also Delderfield 121）。そういう点でも、ヴィクトリアに「植民地統治の軍事政策を練るインド皇帝」のイメージはそぐわないのではないか。

よく知られているように、作者の意図を二次的なものと見なしてテキスト中心に解釈する「客観的」文学研究は、1920年代のイギリスでのリチャーズ（I. A. Richards）や、エリオット（T. S. Eliot）の運動を嚆矢とする。後にアメリカでもこの「新批評（New Criticism）」が盛んになったが、その理由のひとつは大学の教師が文化的伝統の断絶を学生に見いだしたことによる。文学研究の共通基盤がなければ作品解釈は恣意的になりかねないことに不安を抱いた大学の教員にとっては、テキストをその作者と歴史的文脈から独立したものと見なす文学研究法は、知識の乏しい学生を対象とする教室での文学の鑑賞法としてはきわめて望ましいものであった。「新批評」の中心的批評家であるブル

ックス (Cleanth Brooks) とウォーレン (Robert Penn Warren) が『小説の理解 (*Understanding Fiction*)』や『詩の理解 (*Understanding Poetry*)』のような大学生向けの教科書を書いたのはその辺りの事情を示唆するものであろう。「新批評」はテキストに多様な解釈の可能性をもたらしたし、分析という理科系の学問領域の概念でしかなかったものを文学の領域に取り入れたことなど評価すべき点はいくつもあるが、しかしなんといっても一番の功績は、文化的伝統について無知な読者も、あるいはそれを異にする読者（例えば、ヨーロッパの歴史や文化に疎いアメリカ人学生）もハンディを負うことなくテキストに近づくことを可能にし、さらには文学のテキストという共通の基盤さえあれば誰でも議論を戦わせる道を拓いたことであろうか。

「新批評」は本質的に経験主義的かつ人文主義的であったが (Robey 73)、しかし、それ以降、文学理論は、徒に晦渋な文章と難解な用語で読者をテキストから遠ざける傾向があった。そして研究者をテキストを取り巻く歴史的事実から遠ざけてしまった。歴史的事実を無視してどのような文学研究も成り立たないのであれば、ましてハーディのように明確な歴史的地理的枠組みの中で作品を書いた作家を研究する場合には、常にテキストを取り巻く歴史的事実に目配りを怠らないことを我々文学研究者は肝に銘ずべきであらう。そういう意味では、ポスト構造主義から派生した、文学作品を社会や歴史から孤立したものとして解釈することを拒否する新歴史主義やマルキズム、あるいは「中立的」で「客観的」なものの見方は家父長的な価値観を代表するものだとして批判するフェミニズムなどが、テキスト外の文化を含む歴史事象を取り込み、すべてをテキスト化しているのは「歴史的必然」であるような気がする。

言い忘れたが、「エピローグ」で紹介した学会発表者の女性と、「プロローグ」で披露した論文の著者は同一人物で、当時若手の優れた研究者だった。彼女も文学と歴史の間に区分など存在しないと考える、この頃にまだ新鮮だった理論をテキスト分析に援用する野心的な研究者だった。如何せん、際限のない数の歴史のテキストの森に分け入り、それを葉籠中物とするには時間がかかる。「mayor は市長か町長か」という問いかけに彼女が答えられず、ヴィクトリア女王の表象するものについても浅薄な理解で終わっていたことは、文学テクス

トを歴史的コンテクストに置いて読むことの難しさを示している一だが同時に、そういうアプローチが、文学テキストに読みの豊穡をもたらすことを約束してもいるのだけれど。

注

- (1) Trevelyan によればノリッジは当時ブリテン島では第二の都市であった (28)。
- (2) 664年に主教区となった。ここの大聖堂は1249年に建設されたチャプター・ハウス (聖堂参事会事務所が置かれている) と、イングランドでは唯一みっつの尖塔を持つことが特徴的。リッチフィールドはジョンソン博士の故郷でもある。
- (3) ふたつの都市に主教座が置かれているのは、その昔、バースとウェルズが主教座をめぐって争った名残。ウェルズ大聖堂 (1175年に建設開始) は西正面に300のニッチを配し、そこに中世の彫刻がよく残っている。「数ある大聖堂のなかで女王のような存在、優雅で、精妙で、繊細な彫刻でもって驚くばかりの装飾が施されている」 (Clifton-Taylor 274)。
- (4) リンカンの南からイースト・アングリアにかけて低湿地帯が広がっていた。そのフラット・ランドの最南部に石灰岩でできた丘があり、そこに建っている大聖堂。四方を囲む沼沢や小川でおびただしい数のウナギが獲れたという。中世には Elge とか Elgae と呼ばれていたそうだが、ともに「ウナギ地帯 (eel-district)」の意味になる (Reaney 14)。このあたりはしばしば大洪水に見舞われ、そんな時にはイイリーの大聖堂は錨を降ろした大船が大海原に浮かんでいる様を彷彿とさせた。この「島」は軍勢の進撃を阻むほどの沼沢地に囲まれた自然の要塞となっていた。1071年、イングランドをまさに席捲せんとする勢いのノルマンディ公ウィリアムに対抗して、リンカンシャーの領主 (thegn) であったヘレウォード (Hereward the Wake [wake=watchful]) に率いられたアングロ・サクソン軍はここに立て籠もって、最後の勇敢な抵抗を試みた。大聖堂は1083年に建設が始まったので、一部にロマネスク (ノルマン) 様式を残している。完成したのは268年後。近くにオリバー・クロムウェルの生家がある。清教徒革命の間は、王党派の捕虜の収容所に使われていた。八角の塔から北はキングズ・リン、南はケンブリッジまで見晴らすことができる。
- (5) フランスのアール (Arles) やニーム (Nîmes)、イタリアのヴェローナ (Verona) にはローマ時代に作られた円形闘技場 (colloseo) が原型をほぼ保ったまま現存しているが、その理由の中世の間、最初は城塞として活用され、ヴァイキングやサラセンの襲撃が止んでからは、「集合住宅」に転用されていたからだ。それゆえに、石材略奪を免れたというわけ。ヴェローナのコロッセオは現在でもオペラ劇場として使われる。ただし、観客席には照明がないので観客はロー

ソクで譜面を読まねばならない。

- (6) 1704年にモールバラ (Marlborough) 将軍がフランス軍をブレナムの戦いで撃破した功績として、アン女王から下されたバロック様式の宮殿。王族の邸宅以外に唯一「宮殿 (palace)」と呼ばれることが許されている。Thomsonによると、アン女王の義兄ウィリアム3世はジョン・チャーチル (John Churchill、後のモールバラ公) とは不仲で、スペイン継承戦争の司令官であった彼を解任したが、アンは自分の夫をよく思わない義兄への反発から、幼友達サラ・チャーチル (モールバラ公夫人) を遠ざけることを拒否した。そのため姉でありウィリアムの妻でもあるメアリー女王ともアンは仲違いした。アンとサラは蔭でウィリアムをキャリバン (シェイクスピアの『嵐』に出てくる半獣人) とかオランダの怪物と呼んでいたという。1702年にメアリーが死に、アンが即位すると、チャーチル夫妻には栄誉とポストが雨のように与えられた。モールバラ公爵位もこの時に設立された。後のイギリス首相ウィンストン・チャーチルはその子孫。
- (7) ダーラム大聖堂をのぞけばイリール大聖堂と並んで、イングランドで最もよくノルマン様式を残す大聖堂。1118年から1237年の間に建てられた。

(本稿は、「Mayor は市長か町長か」[大阪学院大学『通信』第29巻第2号 (平成10年)] を update したものである。)

Works Cited

- Association of English Cathedrals. Web. Feb. 10, 2016.
- Barthes, Roland. "The Death of the Author." *The Rustle of Language*. Trans. Richard Howard. Oxford: Basil Blackwell, 1986. 49-55. Print.
- Bede. *A History of the English Church and People*. Trans. Reo Sherley-Price. 1955. Harmondsworth: Penguin, 1986. Print.
- Blair, Peter-Hunter. *An Introduction to Anglo-Saxon England*. 2nd ed. 1956. Cambridge: Cambridge UP, 1978. Print.
- Briggs, Asa. *Victorian Cities*. 1963. London: Odhams, 1965. Print.
- , *Victorian People: A Reassessment of Persons and Themes 1851-1867*. 1955. Chicago: U of Chicago P, 1972. Print.
- Cannon, John and Ralph Griffiths. *The Oxford Illustrated History of the British Monarchy*. Oxford: Oxford UP, 1988. Print.
- Chadwick, Nora K. *Celtic Britain*. London: Thames and Hudson, 193. Print.
- "The Church of St Peter Mancroft." Web. Feb. 12, 2016.
- Clifton-Taylor, Alec. *The Cathedrals of England*. Rev.ed. London: Thames and Hudson, 1995. Print.

- Cobb, Gerald. *English Cathedrals: The Forgotten Centuries*. London: Thames and Hudson, 1980. Print.
- “Discover Domesday.” *The National Archives*. Web. Feb. 11, 2016.
- Delderfield, Eric R. *Kings and Queens of England and Great Britain*. 1966. London: David & Charles, 1995. Print.
- Dyer, Christopher. *Lords and Peasants in a Changing Society: The Estates of the Bishopric of Worcester, 680–1540*. Cambridge: Cambridge UP, 1980. Print.
- “Ely.” Historic UK. Web. Feb. 11, 2016.
- Falkus, Malcolm and John Gillingham. *Historical Atlas of Britain*. London: Granada, 1981.
- Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy*. Ed. James Gibson. New York: Macmillan, 1976. Print.
- . *Jude the Obscure*. World’s Classics. Ed. Patricia Ingham. Oxford: Oxford UP, 1985. Print.
- . *The Mayor of Casterbridge*. World’s Classics. Ed. Dale Kramer. Oxford: Oxford UP, 1987. Print.
- . *Tess of the d’Urbervilles*. World’s Classics. Ed. Juliet Grindle and Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1983. Print.
- . *Under the Greenwood Tree*. World’s Classics. Ed. Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1985. Print.
- . *The Woodlanders*. Clarendon Edition. Ed. Dale Kramer. Oxford: Clarendon P, 1981. Print.
- Harvey, Susan. *The Oxford Handbook of Early Christian Studies*. Oxford: Oxford UP, 2010. Print.
- Kendall, Paul Murray. *The Yorkist Age: Daily Life during the Wars of the Roses*. New York: W.W. Norton, 1962. Print.
- Loewenstein, Karl. *British Cabinet Government*. New York: Oxford UP, 1967. Print.
- McConnell, James. *English Public Schools*. London: Herbert P, 1985. Print.
- MaDowall, David. *An Illustrated History of Britain*. 1989. London: Longman, 1997. Print.
- Platt, Colin. *The Parish Churches of Medieval England*. London: Secker & Warburg, 1981. Print.
- Reaney, P.H. *The Origin of English Place-Names*. 1960. London: Routledge & Kegan Paul, 1977. Print.

- Reed, Michael. *The Landscape of Britain: From the Beginnings to 1914*. London: Routledge, 1990. Print.
- Robey, David. “Anglo-American New Criticism.” *Modern Literary Theory*. Ed. Ann Jefferson and David Robey. 1982. London: B.T. Batsford, 1995. 73–91. Print.
- Rowley, Trevor. *The High Middle Ages, 1200–1550*. London: Routledge & Kegan Paul, 1986. Print.
- Thomson, George Malcolm. *First Churchill: Life of John, 1st Duke of Marlborough*. London: Martin Secker & Warburg, 1979. Print.
- Trevelyan, George M. *English Social History: A Survey of Six Centuries from Chaucer to Queen Victoria*. 2nd ed. 1906. London: Macmillan, 1935. Print.
- Yorke, Trevor. *British Architectural Styles: An Easy Reference Guide*. Newbury, Berk.: Countryside Books, 2008. Print.